

定置網漁業後継者として10年  
—持続的な漁業経営を目指して—

内之浦漁業協同組合 有限会社昌徳丸  
柳川 拓哉

1. 地域の概要

肝付町は、大隅半島の南東部に位置し、平成 17 年 7 月に内之浦町と高山町が合併してできた、豊かな自然に恵まれ農林水産業が盛んな町である（図 1）。

町の中央部には 900 m級の肝属山系があり、町面積の 80 %以上を林野地帯が占めている。常緑広葉樹が広く残された山林から流れ出す水は肝属川や高山川を経て、町北西部の肝属平野を流れ、志布志湾へと注ぎ込んでいる。また、南東部の海岸線は急峻な山脈がそのまま太平洋に落ち込み、豊かな海の資源を育んでいる。

肝付町の南側には、内之浦宇宙空間観測所があり、ロケット発射基地の町としても有名である。

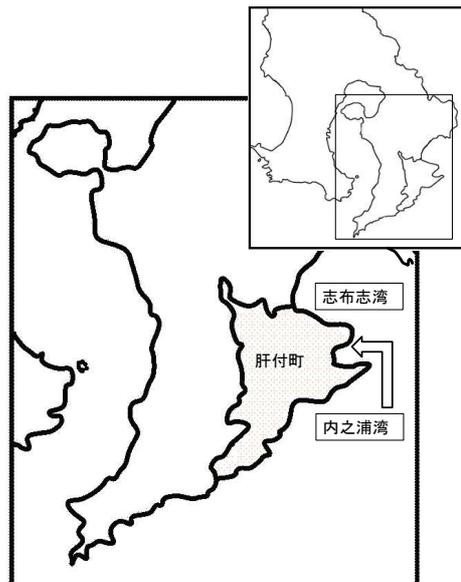


図1 肝付町の位置

2. 漁業の概要

私の所属する内之浦漁協は、平成 17 年 4 月に旧内之浦町内の内之浦町漁協、船間漁協、岸良漁協が合併してできた漁協である。

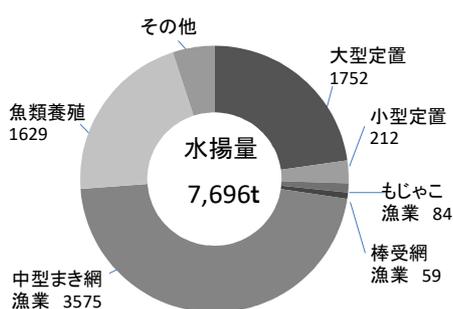


図2 平成29年度内之浦漁協  
水揚量（他港含む）

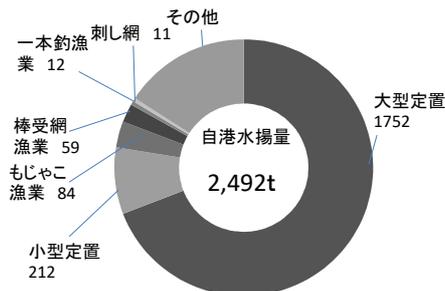


図3 平成29年度内之浦漁協  
自港水揚量（養殖と中型まき網を除く）

平成 29 年度末現在、組合員は正組合員 151 人、准組合員 9 人の合計 160 人である。

また、平成 29 年度の水揚量は約 7,700 トン、水揚金額は約 18 億 600 万円で、その主な漁業種類は中型まき網・魚類養殖・定置網である（図 2）。自港水揚量では、大型・小型定置網の水揚量がおおよそ 8 割で（図 3）平成 29 年度の定置網の水揚量は 1,964 トン、水

揚金額は4億5,000万円を超え、大型定置網は8カ統と、沿岸漁業では定置網漁業の比重が大きい組合である。

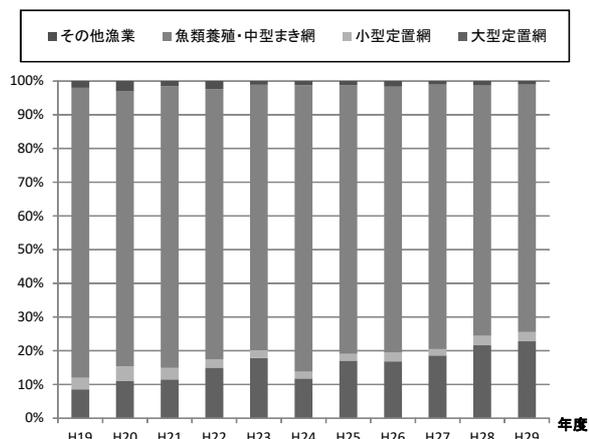
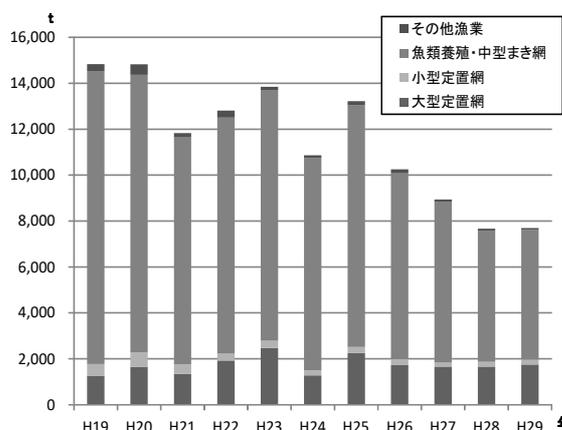


図4 内之浦漁協漁業種類別水揚量

図5 内之浦漁協漁業種類別水揚量の割合

ここ10年間の漁協の水揚量の推移を見ても、定置網の水揚げが安定しており（図4）、組合全体の水揚量のうち、定置網の割合が高くなっていることが分かる（図5）。

定置網で漁獲される魚種は、アジ類、カマス類、サバ類、ブリ、タチウオなど多種にわたる。

内之浦漁協には地方水産物卸売市場があり、漁獲物は仲買業者により地元、県内、県外に発送される。全体の水揚量によっては、入札最後の方は単価が下がることもある。

### 3. 研究・実践活動取組課題選定の動機



図6 内之浦漁協本所の大型定置位置図

私は、内之浦で50年ほど前から中型まき網漁業「有限会社昌徳丸」を営む家の長男として生まれ、小さい頃から祖父と釣りをするなど漁業は身近なものだった。

平成13年、まき網の経営を父に譲った祖父は、大型定置網の経営を開始した。私は地元を離れ鹿児島市の学校に通っていたが、平成15年に帰郷して、20歳から祖父の定置網に乗り組むようになった。

この定置網はその地名から「海蔵定置」と呼ばれる。「海蔵定置」は、内之浦漁協本所の5カ統の大型定置の中で、漁港から最も遠い、内之浦湾の外にある定置網である（図6、7）。また「環巻き方式」という、箱網に付けた環（図8）に通したロープをローラーで巻いていくと、網が魚獲部まで揚げられていく方式の網を、祖父が定置を引き継ぐ以前から使っている。

これにより、通常なら乗組員が15人程度は必要な大きさの網を、自分も含めて8人の乗組員が19トンと3.6トンの2隻の漁船で揚げるができる（図9）。なお、環巻き方式は網が痛みやすいなどのデメリットもある。

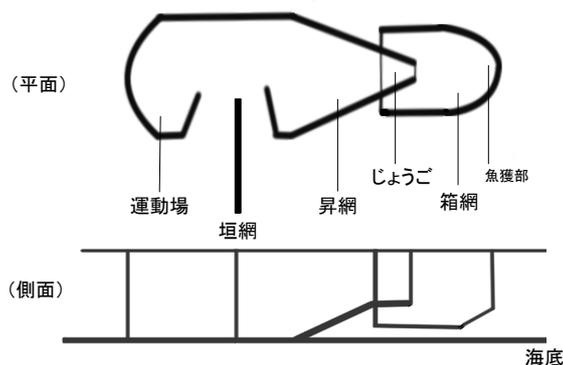


図7 定置網の模式図



図8 網の環巻き部分

私が乗組員として5年経ち漁にも慣れてきた平成20年、25歳の時に祖父が急に船を下りることになり、突然、定置網の経営と漁労長を引き継ぐことになった。

初めて7人の乗組員の責任を持つことになり、自分なりの方法でやらないといけない状況で不安はあったが、乗組員として働きながら「もっといい方法があるはずだ」と思っていたので、網の仕立てや職場の体制など、納得いかなかったところを変えていきたいという思いで、定置網の経営を始めた。

最初の網の改良は平成23年で、自分で色々考え、箱網（図7，10）を短くした。網の構造上、魚の滞留を考えると漁獲量を減らしてしまう可能性もあったが、この時は乗組員も少なかったので作業を効率化するとともに、市場への持込時間を早めることで、入札単価の向上を狙ったものだった。

しかし、これだけではうまくいかず、もう定置網はやめようかと数カ月まき網に乗り組んだりしたが、自分なりに考えを整理して、経営の安定のため、まずは雇用の安定を考えるとという目標を立てた。

#### 4. 研究・実践活動状況及び成果

##### (1) 安定した雇用のために

私は漁労長になった当時から、漁業者はもっと安定して働いているイメージを持ってもらってもいいのではないかと考えていた。

また、それまでの乗組員同士の会話から、乗組員が日々の予定を立てられ、少しでも安定して働きたい思いを感じていた。そこで、雇用体制を整え、効率化を行うなどして安心



図9 使用漁船



図10 箱網の揚網状況

して働いてもらい、乗組員の加入・定着を図りたいと考えた。

以前は乗組員の作業時間は、「作業終了まで」というあいまいなところがあったが、日々の予定が立てやすいよう、毎日8時間の勤務とし、休憩を入れて夏場は4時から13時まで、冬場は5時から14時までと終了時間を決めた。海蔵定置の網は「環巻き方式」で網が痛みやすいため、網替えは3週間ごとと決め、網の補修を計画的に行うようにした。

そして、父の経営するまき網に習い、社会保険に加入するようにした。社会保険は、年金の自己負担額を会社が折半する他、家族を扶養にできるなど、会社としての負担は増えるが、乗組員にとって安心感がある。

また、乗組員の技術を評価し、手当を出すなどして、仕事に張り合いがあるようにも工夫してきた。

こうして、若い人に長く働いてもらい、漁労作業、網の保守管理作業などの経験を積んで早く確実に作業を行ってもらうことが「揚網や網の保守作業の効率化」になる。乗組員の作業効率が良くなれば、網補修などにかかる時間を減らすことができる。これまでは網換えや保守作業に時間がかかってしまい揚網できない日も多かったが、作業を速く進められれば揚網できる日も増え、水揚げ金額も上がる。すると乗組員の給与も上げることができ、安心感を持って働いてもらうことができると考えている。

また、乗組員が経験を重ね技術が上達すれば、網の耐久性も上がり、使用年数をより長くでき、また網の部品を自分で作れるようになるなど、網購入のコストを下げることもできる。

一方、5～6年前からアルバイトとして70歳以上の方を2人、水揚げ時の魚選別など行ってもらっている。1人はまき網を引退した方で、もう1人は元自衛隊員である。好きな魚を扱う仕事をすることで本人たちもやりがいを感じてもらっており、会社としても助かっていて、双方に良い関係となっている。

## (2) 定置網改良の実践

網改良についても目的を整理し、優先順位を付けた。その順番は①「網の耐久性」と「揚網や網保守作業の効率化」、②漁獲量の増加である。

「網の耐久性」と「揚網や網保守作業の効率化」を「漁獲量」より優先させた理由は、効率化により乗組員が働きやすい環境にすることが雇用の安定に必要で、効率化により時間ができれば、新しく網の改良などのチャレンジもでき、おのずと漁獲量も増えていくと考えたためだ。

そして、コストとのバランスを取りながら網の改良を継続するためには、自分と考え方の合う網業者の協力が必要と考え、業者を調べて探し当て、意見交換しながら網の改良を少しずつ続け、今に至っている。

平成25年には、「漁獲量の増加」を狙い、網成り修正として“運動場”の構造の見直しをするとともに、「耐久性」を考えて網地素材をポリエチレンからテトロンに変更した。

また、大漁の際、魚を貯めておける「金庫網」を設置した。

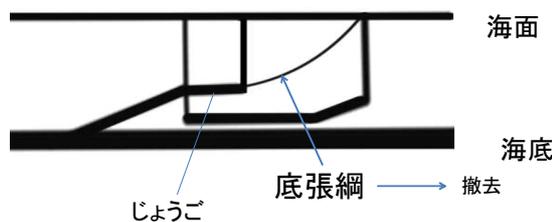


図11 底張網

さらに平成 26 年には、“じょうご”の改良に取り組んだ。それまで網揚げ前には、“じょうご”の口を支える底張（そこばり）の綱（図 11）をゆるめる作業が必要だったが、“じょうご”を重くし形を整えて底張の綱をなくし、作業を省略した。また、28 年には網揚げを容易にし、網の汚れを少なくして管理もしやすいよう、“じょうご”の目合いを 12 節から 6 節と 2 倍にして、「揚網や網の保守作業の効率化」を行った。

### (3) 中型まき網との合併

平成 27 年に、父の経営する中型まき網「有限会社昌徳丸」と私の定置網「昌徳丸」が合併した。

これにより全体の経営は父が、会計は母と妻が行い、私は代表となり定置網部門の経営を任された。合併する以前の水揚げが不安定な頃は、まき網部門には支えとなってもらった。特に網の改良などはまき網部門の支援がなくては思った改良ができなかったと思う。

合併後は、まき網か定置網どちらかの手が足りなくなる場合、例えば定置からまき網へ 1 人異動するなど、乗組員を補充することがスムーズにできるようになった。1 週間や 10 日間の短い期間でも、船上作業に習熟した乗組員が確保できることは、両方の部門にとって安心感につながっている。

また、他には各部門でストックしてあるロープを他方の部門で使用することができたり、まき網が台風避難で入港した時には、積んである氷を定置網部門が使用し、無駄にしないなどのメリットがある。

## 5. 波及効果

### (1) 雇用の状況

現在の乗組員の年齢構成は、70 歳代が 1 人、60 歳代が 1 人、40 歳代が 1 人、30 歳代が 3 人、20 歳代が 2 人で、場合によってはまき網部門と行き来しながら、働いてもらっている。これは、内之浦漁協の定置網では平均的だと思うが、県全体の漁船漁業就業者と比較すると若い（図 12）。

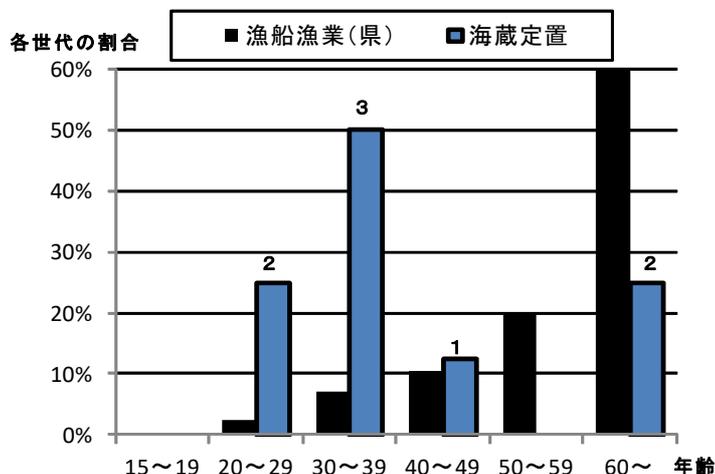


図12 昌徳丸定置部門と県漁船漁業男性就業者  
年齢組成の比較（数字は海蔵定置人数）

4 年ほど前に、定年退職した 4 人に代わり 20、30 歳代の 4 人を乗組員として確保することができたが、皆技術も習得しつつあり、乗組員の定着もある程度できてきたのではないかと思う。

若い乗組員が技術を習得して作業の効率化が進むとともに、網の改良による効率化も進めば、環巻き方式で乗組員が少ないこともあり、給与を上げることも可能になり、さらに乗組員に安心感をもって働いてもらうことで、安定した経営にもつながると思う。

そして、若い乗組員の定着が、地域の活性化にもつながっていくのではと考えている。

また、海蔵定置の状況を見て、他の経営体でも「環巻き方式」の導入を検討しているとの話もある。

## (2) 漁獲状況

平成 25 年の金庫網の設置により、平成 26 年にはメジナの豊漁があり、それ以前と比べると水揚量が増加してきた。平成 29 年 4 月には、1 日 1 万匹を超えるブリを漁獲した。1 日 1 万匹以上ブリを漁獲することは、内之浦では「万越し」といい、昔は踊りを披露し祝うなど大変めでたいことで、今回は 31 年ぶりのことだったそうだ (図 13)。



図 13 南日本新聞

平成 29 年 4 月 9 日

定置網への魚の入網は、魚の回遊経路によるところが大きく、これらの好漁が網の改良の結果と言い切ることは難しいが、内之浦漁協の大型定置網全体の水揚量に占める海蔵定置の水揚量の割合は、平成 27 年度以降上昇傾向にある。大型定置の統数が維持されている中、海蔵定置の割合が増えているということは、網の改良は効果があったのではと思っている (図 15)。

こうして、平成 27～29 年度の水揚金額は年間 5,000 万円を超えるなど、近年は好漁が続いている (図 14)。

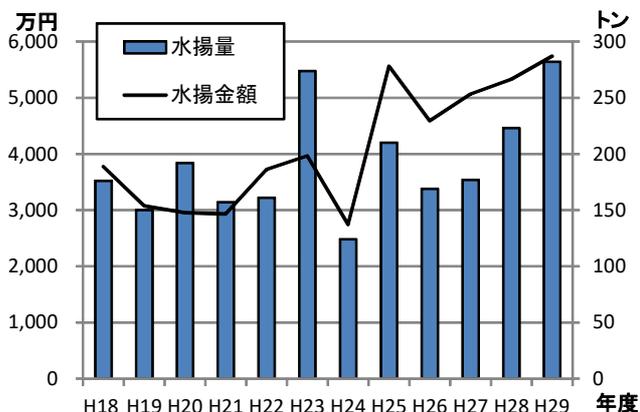


図 14 海蔵定置の水揚量と水揚金額

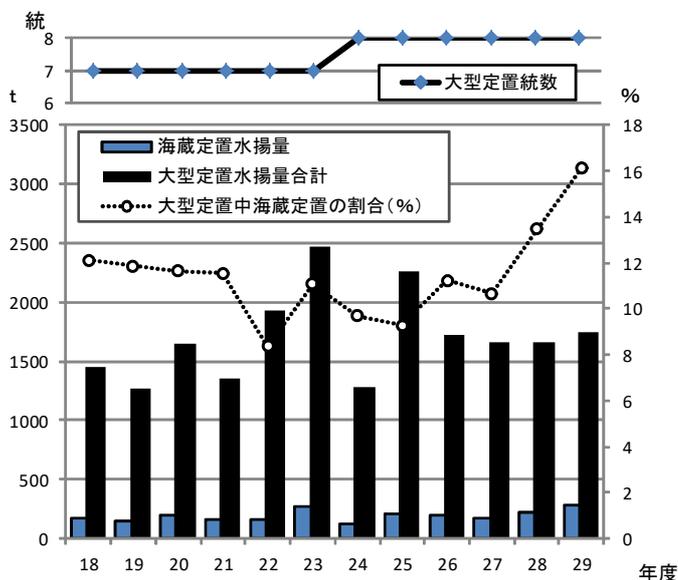


図 15 大型定置網全体に占める海蔵定置水揚量の割合

## 6. 今後の課題や計画と問題点

定置網を任されて、雇用の改善や網の改良等、自分なりに考え 10 年間試行錯誤しながらやってきたが、他の定置網の先輩方と比べるとやっとスタートラインに立てたという気

持ちである。

雇用の面では、まずは今の乗組員に安心して長く働いてもらいたい。さらに、これからも全国的な人口減少により人材確保は難しくなっていくだろうから、揚網や網の保守作業の効率化を進めて乗組員の負担を軽減させつつ、新たな人材確保の方法も考えなければならぬと感じている。

網の改良については、終わりが無いように感じているので、年間水揚げ 6,000 万円を目指し、コストとのバランスを考えながら計画的に網の改良を続けていきたい。

また、魚価をより高くするため、将来は活魚出荷を行いたいという希望がある。蓄養イケースは準備しているので、これから行動に移していきたい。

最後に、漁業を始めてから 15 年、漁業後継者として 10 年になるが、父は口を挟まず私のやりたいようにさせてくれた。面と向かってあまり言わないものの、父と母には感謝している。

今後も色々な面で改良を行い、持続的な漁業経営を目指していきたい。